# 社会運動としてのフェミニズムを再考する

## ── 北原みのり著『フェミの嫌われ方』を読みながら ──

Rethinking on Feminism as social Movement :
A Book Review “How is a Feminist hated?” by Minori Kitahara.

井上　芳保，伊藤　奈緒，北原みのり

**はしがき**

ある種の社会運動を当事者の抱える生きづらさの表現として捉える観点を私は提示してきた.「痛み」を抱えた人々の態度設定のありようを深く厳密に問わねばならない．フェミニズムを事例にこの課題に応えようと構想された研究会の成果に基づく試論を展開する（４節）.

以下に掲載するのは,2006 年 3 月 17 日に札幌学院大学Ｃ－403 教室にて開催された社会臨床研究会第 2 回の記録である（１－３節）．表記の伊藤，北原のお二人を東京からお招きして行った.

当日は，伊藤がまず北原みのり著『フェミの嫌われ方』（新水社）の内容に関わって何点かの問題提起を行い，北原がそれに対してコメントをしながら自分の考えを開示していくという形で進行した．その後，他の参加者からの発言が続いた.本学人文学部の教員はじめ学内外の研究者,一般市民の方々が多く集まり，盛会となった.

伊藤は壁にぶつかった後のフェミニズムがどう状況を打開していけるかという関心から「開き直る」というより「ひがむ」という態度の有する可能性,価値転倒ではない方向が生まれてくる可能性に着目している.北原はラブピースクラブという場を創り出した当人であり，フェミニズムが実際に直面するさまざまな困難や問題点について多くの指摘をした後，今は組織を経営的に上手く運営していくことに関心が向いていること，あきらめずに連帯をめざしていくことの大切さなどを話題としている．質疑応答でもラブピースクラブという実践や女性による新しい社会運動の可能性について多様な観点から意見が出され，伊藤，北原もそれに応答し，全体として密度の濃い議論が展開されたと思われる.

できるだけ当日の研究会の臨場感をそのまま残すことにした．テープ起こし作業については，この研究会の場に参加し，当時札幌学院大学社会情報学部 3 年生で井上ゼミに所属していた鈴木圭一，札幌学院大学人文学部 2 年生（現在 4 年生に在学中）の黒川菜月が担当している．なお質疑応答部分ではやや冗長なので井上の判断で割愛した箇所がある.

（井上芳保）

Inoue Yoshiyasu　札幌学院大学
Ito Nao　東京大学大学院博士課程
Kitahara Minori　ラブピースクラブ

目次

開催のあいさつ（井上）
1．伊藤報告
1－1．社会運動としてのフェミニズムの周辺とその多様性
1－2．「自信」をどのように持つことができるか
1－3．開き直れず，ひがむという地点で
1－4．価値の逆転を明示しないフェミニズムが出現している
2．北原報告
2－1．ラブピースクラブをセックスお助け隊と一緒にしないで欲しい
2－2．フェミニズムの代表例にはなっていない女性たちの動きを見ること
2－3．ぐじゃぐじゃに立てこもるよりも「そこでは生きていかない」
2－4．「フェミの妖精」から自由に生きているのか
3．質疑応答
3－1．母親との関係の複雑さ，フェミニズムの難しさ
3－2．「一人一派のフェミニズム」の戦い方の可能性
3－3．「降りる」という選択によってこそ開けてくる新境地
3－4．痛さへの共感によるつながりを信じて
3－5．専業主婦でも何かを感じている人はいる
3－6．「女から降りる」よりも「フェミから降りる」ほうが大事
3－7．人は変わるし，時代も変わっていくかもしれない
4．試論的のコメント：生きづらさからの態度設定をめぐって（井上）
4－1．ラブピースクラブが主婦から被ったバッシングについて
4－2．「ひがむ」より非「やせがまん」的な「開き直る」のほうがいい
4－3．「クィア宣言」的生き方への誘い

## 開催のあいさつ

**井上**　今日はお集まりいただきましてありがとうございます．この社会臨床研究会，今日が二回目になります．今回初めてお会いする方もいらっしゃいますから，最初に趣旨を簡単に説明しておきます．私やこの研究会を一緒に進めていこうとしている仲間が最近たいへん気にしていることとして，何か厄介事があった際に何でも心理次元に還元して片付けてしまいがちではという問題があります．カウンセリングブームや小中学校で無償配布されている「心のノート」などがまさしくそうした例なのですが，何でも個人の内面の，心の問題にされてしまうということが起きています．この研究会ではこうした動きが何を意味しているのかさまざまな角度から光をあてて検討して行きたいと思っていますし，またそうした動きに抵抗する可能性をいろいろと探っていきたいということも考えています．「社会臨床」は「心理臨床」に対抗することを少し意識してつけられたものです．日本社会臨床学会という団体がありますし，私自身がその会員ですが，この研究会はそれとは直接の関係はありません．

前回の2006年2月2日には「セックスお助け隊」をコーディネートしているキム・ミョンガンさんをお招きして「近未来のセクシャリティを予測する」というテーマで行いました．「セックスお助け隊」というのはセックスレスで悩んでいる女性に「心のケア」だけではなくセックスのケアサービスを提供するという斬新な試みです．長年にわたってご夫婦がセックスレス状態の女性やシングルで仕事一筋で生きている女性がキムさんのところを訪れています．結局，対症療法ではないのかという批判もありますが，私はこれを心理主義化に抗して社会を変えていく実践の一つとして可能性のある試みだと考えています．む

ろん問題がないわけではないし，手放しで絶賛というスタンスを私がとっているわけでもないのですが，一応そのようには言えます．

今日はお二人の方をゲストにお招きしています．北原みのりさんと伊藤奈緒さんです．北原さんは皆さんよくご存知のようにラディカルなフェミニストであり，ラブピースクラブを主宰していらっしゃいます．ラブピースといっても「愛と平和」ではないんですね．ピースは「かけら」とか「断片」という意味のほうで「平和」とはスペルが違います．つまりラブピースというのは「愛のかけら」ということで，北原さんはバイブレータという女性のためのセックスグッズにそのようなネーミングをしているわけです．ラブピースクラブはそうしたセックスグッズを販売するという形で女性の自立をサポートする実践をしているところです．ラブピースクラブも前回のキムさんと同様で社会を変えていく貴重で斬新な試みであると思います．

他方の伊藤さんは東京大学の大学院生で社会学を研究していらっしゃいます．特に社会運動について検討することをご専門にされています．私の理解するところでは，運動に参加するか否かという態度選択のボーダーラインのような部分に関心がおありで，これまでアイヌ問題に関する社会運動の支援者を対象に調べていらっしゃいます．運動に参加したいけれども，いろいろな事情があって躊躇している人，非常にその運動が気になりながらも参加には踏み切れないでいる当事者の問題，あるいは逆に当事者ではないのに運動にどっぷりと漬かった状態になっている人の抱えている特有の問題といいますか，そのような微妙な状況にある方の意識のことなどをお調べになっているようです．

今回は，このお二人においでいただきましたので，フェミニズムというものを一つの社会運動として捉えて，そのさまざまな可能性について掘り下げて行けるような場にできたらいいなと思っています．後でフロアの皆さんにもいろいろ自由に意見を出していただきたいと思います．

伊藤さんの方で問題提起のレジュメを用意して下さっていてお手元に回っているかと思います．まずそれに則して話してもらいたいと思います．北原さんの『フェミの嫌われ方』という著作を主な対象としていくつか問題を出しているペーパーです．そのあとで北原さんにもお感じになったことをフリーに語っていただくという形で進めたいと思います．それでは伊藤さん，お願いします．

## １．伊藤報告

### １－１．社会運動としてのフェミニズムの周辺とその多様性

**伊藤**　今日の私のレジュメのタイトルは「開き直りではないフェミニズム，開き直るまでのフェミニズム」ということで，北原みのりさんの本『フェミの嫌われ方』を読んで聞いてみたいことをまとめました．論文の形でまとまっていないんですけれど，これに即して問題を出していきたいと思います．

私は先ほど井上先生からご紹介いただいたように社会運動の研究をしている大学院生なのですが，もともとその出発点というのは，自分が高校生の時の運動参加者に対する偏見や違和感や嫌悪感と，それとあと，まあ後になってから出てきたそれらへの反省と疑問でした．だから今でも，運動不参加者や敵対者，傍観者は運動をどのように感じているのか，サクセスストーリーではなくて，むしろその運動に違和感を感じたり，部分的に共鳴しつつも部分的に反発している人々の，そういった葛藤や揺れに興味があるんですね．

北原さんの本でも，どうしてフェミニズムがそんなに嫌われるのかと問題提起していらっしゃいますが，最近よく「フェミナチ」という言い方を聞きます．あからさまなフェミニズムへの反発というのが確かにありま

す．それと同時に，社会運動について私が調べているケースと同様，どっちでもいいという無関心の層もいると思いますし，または自分の女性として被る不利益を感じていながらも，フェミニズムには共鳴できないという葛藤を持つ方もいます．そして，共感はしているのだけれども，まだそのフェミニズムの運動に関わっていると意思表明できないという方もいます．様々な方がグラデーションのような形で存在していると思います．つまり多様な層がフェミニズムの周辺にいるように思います．

私が思うに，運動というのは，どんなフェミニズムであっても，傍観者や潜在的な支持者，場合によっては運動の敵対者というものによってこそ,実はその幅が広げられている．というか，運動の可能性を広げてくれる存在にもなりうるんじゃないか．だから不参加者というのを切り捨てるのではなくて，もうちょっと不参加者や運動の周辺にいてうろうろしているような層にも目を向けていってもいいのではと，自分の研究では考えているんです．

フェミニズムは一人一派という言葉にもありますけれども，フェミニズムを自称している場合でもそうでない場合でも，女性の様々な動きというのがあって，そういった運動の周辺と言えるのか，敵対と言えるのか，それとも潜在的支持者と言えるのかわからないんですけれど，そういった多様な人たちにもどんどん注目して，フェミニズムの幅を広げるということを検討してみたいと思いますね．それはフェミニズムの嫌われ方ではなくて，その好かれ方，もうちょっと見方を変えてフェミニズムに関わっていく人達であるかもしれないし，例えば，意外に自分と近かったと気付いたりすることになるんじゃないかなと，というようなことに目を向けていきたいと思います．

### 1－2．「自信」をどのように持つことができるか

まず「「自信」をどのように持つことができるか」です．「やばい！　Love 論」という章が，北原さんの『フェミの嫌われ方』にありましたが，プロデューサーのつんくの，あまりに硬直した女性像というのに愕然として，それが一定程度女性の自己意識に影響を与えてしまっているということに関して北原さんはこのように分析しています．

「ただ，なんとなく，つんくのラブ論のむちゃくちゃな論調に，『なぐさめられました！』なんていっている女たちの顔やコメントを思い出すたびに，悲しい気持ちになるのだ．それをもったいぶって取り上げる，女性誌がなんだかイヤ～なのである」（P.56）

「オンナの場合は，自信がないどころか，自分を否定的にみることの方が多いように感じてしまう．自分の現状を，肯定的に見ることのできない人が多いのではないか．」（P.57）

女性たちはつんくに好かれたことが嬉しいんじゃないんですよね．つんくの背後に見える男性社会というものから自分が歓迎されることが嬉しい,オヤジといいますか,そういったオヤジ予備軍ですとか，男性社会から歓迎される存在であるのを認められたことが「なぐさめられました！」とかにつながると思うのですね．その理由として，北原さんが見抜いていらっしゃいますように女性が自分自身を肯定することが難しく，男性の目線を通じてしか自分の評価を変動させることが出来なかったということがあります．私もこれは全く同意見なんですね．

では，この状況をどう乗り越えるかと考えたときに，北原さんは「男に愛されなくたって，男にもてなくたって，いいじゃん！」,「女の人，もっと自信をもとうよ」という処方箋を示してくださいました．私が定義する，開き直りというか，従来の価値の棄却です．転

換までいかなくても棄却ですよね,「男にもてることが女性の幸せなのだ」という価値観を棄てるのですから．北原さんが共鳴している「anan」や「FRAU」などにみられる「知的な女はセクシーである」(P.63)というメッセージは「勉強に熱心な女の子は魅力がない」という，これまでの通念をひっくり返すという意味で価値の逆転ともいえるのですね．

開き直りというか，こういった価値の棄却や価値の逆転というのは強力な作用を持つと思っているんです．ただ，その反面，どのように自信をとり戻し，どのような価値を棄却するのかというプロセスの部分が一足飛びになっちゃうと思うんですね．もちろん価値の逆転が出来れば，あるいは開き直りとか，棄却が出来れば，私もとても有効だと思うんですけれども，ただ女性がこれまで身体化されてきたり，内面化されてきたような支配的な見方や差別意識から逃れるのは結構困難です．

ただそれには「開き直ればいいんじゃん」というような安易なケースも入っていますから吟味が必要です．いい開き直りの可能性ということになります．なかなか簡単にいい開き直りができないところがあって，その価値からいい形で開き直っていくプロセスに私はすごく興味があるんですね．そういった価値の逆転は不可欠なのだけれど，うまい方法がわからずに皆さん苦しんでいるのではないのか，もちろん自分も含めてですが，苦しんでいるのではないかと思っています．

### １－３．開き直れず，ひがむという地点で

そこでオルタナティブではないんですけれども，もう一つの考え方として，開き直れずにひがむという地点にもちょっと目を向けてみようということを考えました．自分の中にも染み付いている差別意識を問題化せずに向き合った場合，まあ価値の逆転が出来なかった場合にどうなるのか，その一つとして私は「ひがむ」という態度を考えているんです．

開き直りが従来の価値の逆転もしくは価値の棄却であるのに比べて，ひがみというのは価値の逆転をはかっていないというか，はかれないでいる段階だと思うんですね．それは「開き直ればいいじゃん」とか,「そんなの無視すればいいじゃん」と言われながらも，やはり「自分だって男性にもてたい」,「好かれないと自信が持てない」という感情をそのまま捨てずにいる状態です．

「ひがむ」というのは基本的に引き受けることだと考えられます．もちろんこういったものは，結局，女性の抑圧された感覚っていうのを肯定してしまうという問題がありまして，もちろん下手をすると支配的な男性社会の目線を結果的に温存してしまいます．また「そういったってしょうがないじゃん,それ以上考えるのをやめてしまおうよ」という諦めのような問題も生ずると思います．また仮に女性同士が，そのひがみというネガティブな意識を求心力として連帯できたとしても，それがフェミニズムに即つながるということはないと思います．

北原さんも『オンナ泣き』で言及している林真理子さんは，当時は「ねたみ，ひがみ，そねみ」という言葉に代表される現実を描いた作家ですね．職場で能力があっても「美しくない」と判定された女性というのは，如何に生きづらいか，社会でどのような反応に直面しているのかを暴露して多大なインパクトを与えました．それはその当時の多くの女性たちの共感を得たと思います．ただ，同時にとはいえ林さん本人が一部のフェミニズムの主張，容易に価値の逆転を意図するような主張に対してはむしろ反発していて「自分はまじめな労働者だ」,「まじめな社会を生きていくんだったら，簡単に社会のことをひっくり返すなんて言うのは逆に不誠実だ」というようなところもあったんですね．

しかし,「ひがむ」という感情は，考えよう

によっては時として自分と社会との関係といいますか，つながりというのが如何に強烈であって，だれもそこから逃れられない，高みから見ることが出来ないんだということを再確認させる効果を持つと思います．

そこでその事例として私が今回読んだ本から取り上げたいと思います．一つは浅野千恵さんという社会学者による『女はなぜ痩せようとするのか』です．浅野さんは摂食障害の経験を持つ女性にインタビューを行って成果を本にまとめた方ですが，摂食障害の経験を話してくれた「Ｆさん」の語りの中で，このように「ひがみ」を位置付けています．

「〈ひがみとかをふくめてものをいってもいいし，そういうことをふくめて問題にできるんだっていうことに気づかされたというか．私はひがまされているんだ，からかわれているんだっていうふうに思えたことかなあ．〉」（浅野，1996：148）

ひがみながらミス・コンテストに反対してもいいんだ．ひがみっていうのは自分の勝手な個人的な感情だから，そういうのは抜きにして運動やらなきゃならないと思っていたらしいんですね．それでそれまで女性の賃金差別だとか，そういう問題にばかり関わってきたＦさんが，やっぱりひがみとかを含めて自分の感覚をよりどころというか，起点，出発点にしながら運動をやっていいんだって思ったらしいんです．それに対して浅野さんはどういう分析をしているかというと，Ｆさんは自分自身の感情をよりどころにしながら，自分のおかれている社会状況を読み解くための道具を獲得したといっています．

実はこの後の注をみると，Ｆさんからのお手紙を分析者の浅野さんが貰ったらしいんですね．そのお手紙を読んで浅野さんがこういうことを言っているんです．「差別を受けた者自身が差別の論理を内面化してしまうことは，日常的に差別を受けている状況，あるいは日常的に暴力にさらされている状況をその個人が生きぬいていくためには，程度の差こそあれ，不可避なことだと私は思う．…中略…しかし，いささか楽観的に聞こえるかもしれないが」．それで，この中略というところに浅野さん自身も，まあ自分もそのようにして生きぬいてきたと言っているんですね．

「しかし，いささか楽観的に聞こえるかもしれないが――，そのような自分自身の中に巣くう自覚的・無自覚的な差別や暴力」を結局自分も既存の価値観に沿って判定してしまっていると，そういうことだと思うんですよ．「差別を発見し，ひとつひとつ解体していく作業を続けていくことが，フェミニズムのめざすところであると私は思っている」と．浅野さんがここで「発見し，ひとつひとつ解体していく」というように，「『差別の論理』を内面化してしまう」ということは，実は社会に訴えかけることと矛盾しないと思うんです．実際Ｆさんは，ひがんでいる自分を直視して，それを一気に解消しようとはしないで，それを抱え込みながら「ミス・コン」の反対運動に加わっていったということです．

これは，言い換えれば次のように言えるんじゃないかと思うんです．すなわちそれは，社会に対する異議申し立てをするのであっても，その個人が直ちに首尾一貫した対抗的価値観に沿って自分を変えるべきだという義務など負う必要はないんじゃないかということです．女性は時に差別的であったり，時にそうじゃなかったりする，そういう一貫性のない混乱した自分のままで，フェミニズムに関わることが出来るんじゃないのかと私は考えるのです．

だから，この点は，ウーマン・リブの中心的担い手といった田中美津さんが，それまであぐらをかいて話していたくせに，好きな男が入ってくると急にそれを正座に変えてしまったということを「とり乱し」といって，それをみっともないって捨てたり，運動に

とって足かせになるんだといってそういう感情を捨てるんじゃなくて，むしろそういった「とり乱し」にこそウーマン・リブの核心的部分があるんじゃないかって言ったんですね．そういった点も関係するんじゃないかと思います．

林真理子さんが当時注目されたのはやっぱり美醜へのとらわれという自分自身も免れていない状況を，もちろん彼女にしても解体は出来なかったと思うんですけど，少なくともそれを発見したことを否定しなかったからです．これはたぶん，「私差別していないわよ．みんなが勝手に差別している」っていって「自分は関係ないよ」という態度をとっていたら，意外にその当時共感されなかったと思うんですね．

私が思うに「私も差別意識があるよ」ということを隠さずにむしろ出しちゃったからこそ，── もちろん林さんはそこまで戦略的にやっていないとは思いますけれど，── 多くの人の共感を得られたんじゃないかと思うんです．そういった点で開き直ると同時にひがむという感情に向き合うこともいれてみたいと思います．

### １－４．価値の逆転を明示しないフェミニズムが出現している

そのことと関連して言っておくと，もちろん，私は開き直りのフェミニズムというのを無意味と思っているのではありません．建前であると言い切るのもおかしいと思いますし，ひがみが実感で開き直りが建前だとかそういう構造を言っているのでもないんですね．もちろん，人によってはひがまない人もいるし，本当にひがまないときがあるというのはわかるんです．ただ，同時にだから言えるかもしれないのは，そのときそのときの社会を写しながらフェミニズムは変幻自在な存在じゃないかということです．だから開き直りのフェミニズムが出てくるときもあるし，逆にひがみのフェミニズムというのが出てきてもいいんじゃないかと思っているんです．

その時代，その時代によってフェミニズムっていろんな顔を見せている．しかも，見えやすくなっている．どんなフェミニズムが見えやすくなるかっていうのはすごく時代を写していると思うんですね．そういうことを考えたんです．

付け加えれば，卑怯なフェミニズム・バッシング，私がさっき言いましたような，「フェミナチ」だとかそういったラベリングにはもちろん徹底的に対抗しつつも，そういった表面的にはわかりにくいんだけど，フェミニズムと共鳴したり，少なくとも対話できるような周辺の動きに接近してみたら面白いのではないかと思っています．

ここで念頭においている事例は，まあ有名なんですが，皆さんもご存知の「負け犬の遠吠え」現象と『美人になりたい・うさぎの整形日記』や『自分の顔が許せない』の著者である中村うさぎさんの試みの二つです．

「負け犬」の表現にもありますように，「30代，未婚，子どもなし」に該当する層を著者の酒井順子さんは「負け」と定義しました．酒井さんは，彼女たちこそ自由なんだとか，ああいう生き方が豊かなのだとか，逆に開き直る，開き直るというか，価値を簡単に逆転しちゃったら，あんなに読まれなかったんじゃないかと思うんです．そういうふうに価値の逆転をしないで，どんなに美人で仕事が出来ても，まあ30代，未婚，子なしだったら負け犬なんだなという強烈なメッセージを酒井さんが送って，一旦社会の価値観を引き受けてしまう．うまいんですね，やりかたが．戦略的に入れてしまう，取り込んでしまう．だけれども，負け犬ですが，それがどうしたのって問いかけることで社会が面白がって「負け犬」「負け犬」って彼女たちにラベリングをすればするほど，じゃあ「勝ち犬」はどうなのかという，コインの裏側の問題を浮上さ

せてしまうんですね．それが読者に「じゃあ勝ち犬はどうなのか，それほど豊かで楽しいのか」という疑問を生じさせて「こんな社会で勝ち犬になることなんてむなしい」と，無意味さ，無意味さというか薄さみたいなものに嫌でも辿り着かされてしまう．そういううまいことを酒井さんはやっていると思います．

一方の中村さんは，自らのファッションや美への強烈な執着を明らかにしています．著作に『美人になりたい』とありますが，それを公言して整形手術の場面を公開したりして，２週間ですよね．もちろん中村さんの場合は，整形手術や美人になりたいという表明は，男性の目線じゃなくて，もてるためというより，自分のなりたい姿に近づきたかった，近づくために整形手術をしたと言っています．整形の前のほうが意外に丸顔でもてていたんだけれども，そんな弱いように思われたくなかったから整形したとも言っています．だからまあ，もともと，そういった支配的な女性像というのと無縁だったのかもしれないんです．ただ，中村さんを，笑いをとっているとか，ネタにしているだけと読みすごすのじゃなく，なんか面白いこと言っているなって思っているんですね．それが次のページなんです．それは，石井政之さんというユニークフェイスの運動をやっている方との対談の話を受けたときに中村さんがこういうことを言っているんですね．

「おそらく女というものは，他者からの容姿の判定をされる機会が多く，それゆえ自分の肉体を『他者の目に映る客体』として捉える癖がついてしまい，その「客体としての自分」と「自己イメージ」とのギャップに苦しむのだと思います．…中略…では，他者は何故，人を容姿で判定するのか？　これについては，私はいまだに答えを見出しておりません．何故ならこの私もまた，他者を容姿で判断してしまうからです．「人を容姿で差別するのはやめよう」などと提唱することは虚しいことです．現代社会はそれをやってきたからこそ，現実の『肉体不平等』を隠蔽してしまい，我々はますます歪んだ自意識を抱えるはめになったのだと考えます．」（中村・石井，2004：11－12）

中村さんも自分にある差別意識とどう向き合うかと考えたときに，「それは私とは関係ないよ」と一蹴してしまう前に，徹底的に自分の中にある，本当に浅ましいと言えるような上昇願望にこだわってみちゃうんですね．それが，破産寸前になっても一流ブランドを買いあさっているとか，整形手術をしたりすることといえると思うんですけど，自分のこうなりたいという美意識みたいなものにとことんこだわっている．

自分が囚われている願望というのを起点にしながら，中村さんはこういうことを言っています．それは，「自分が育ってきたのが女子高で，すごく敬遠されている階層も同じような人達で，傍から見ると恵まれている，あるいは，可もなく不可もなくというような人がもつコンプレックスを「恵まれたやつの贅沢病だよ」と，「途上国の状況を見なさい」「そんな価値観は捨てなさい」というのは簡単かもしれないけれども，ただその，恵まれている中の小さな差異に悩んでいるからといって，その地獄が浅いとは限らないと思う．逆に目に見えない地獄だから，自分でとらわれていてもわからないので，かえって闇は深いかもしれないと思うんですよ．そういうものに足をとられている人たちに，私はやっぱり興味をもってしまうし，書いていきたいなと思う」という決意表明をしてるんです．

こういった中村さんの問題意識や好奇心というのは，少しでも他人に勝ろうとする，中村さんの言葉で言えば「どんぐりの背比べ」「泥沼の戦い」といった，女性にとっても男性にとっても生きづらい社会というのを温存し

てしまうのか，そうともいえると思うんです，ある意味では．ただし，それだけではなくて，やっぱりその「泥沼の戦い」みたいなものを「いらないよ」って捨てるんじゃなくて，内側にもとことんこだわってみる．どろどろの中を自分も戦って，自分もその中での「どんぐりの背比べ」に加わってみちゃう．まあ，それだけではないんですけれども，あるときには開き直ったり，あるときには加わってみたりと，まとまりのない自分のままだと思うんですけれども，そういった中に入っていくことで，内側から空虚さを露呈させるか，内側から崩していく効果も生むのだろうか．私もいまだにこれはわからない，だから，北原さんをはじめ皆さんに聞いてみたいと思っているんです．

北原さんはこういった，ご自身の方法論の「弱者の開き直りの楽しさ」や「軽やかに生きる図々しさ」っていうことを『ブスの開き直り』という著作で書いていらっしゃいますが，こういった「軽やかに生きる図々しさ」とか「開き直りの楽しさ」というのは，一見してこの「泥沼の戦い」とちょっと異なっているとも見えるんですけれど，だけれども中村さんが完全にフェミニズムの敵かといったらそうでもないような，なんか面白いことを提示してくれているのじゃないかとも私には思えるんです．だからこういった層に目を向けてみるとどんなことがいえるのか，私自身も聞いてみたいかなと思うんですね．それがまず聞いてみたいことです．

最後に個人的な感想で，これは本当に今回は中身を膨らませられなかったのですけれど，一読者としての私の本当に素朴な感想です．「マザコン」の章をとても面白く読みました．あまりに新鮮で全然自分の意見を膨らませられなかったのが残念です．特に今の社会がマザコンに厳しい一方でファザコンに甘い．というかお父さんと仲良くするとなんか麗しいじゃないんですけれども，それが容認されてしまう．それはなんというか，彼氏とか，恋人とか結婚相手であっても意外にそうなんじゃないか．「私，お父さん子だから」と言うと，意外に彼氏は「ウエー」って言わないで，そのまま「君いいね」みたいな感じになっちゃう，そういうのあるんじゃないかなと思うんです．だから，それを見抜いて娯楽業界が戦略を立てているんじゃないかという指摘は非常に鋭いなと思うんです．

とりあえず以上です．

## 2．北原報告

### 2－1．ラブピースクラブをセックスお助け隊と一緒にしないで欲しい

**北原**　始めます．北原です．どうもはじめまして．よろしくお願いします．始めに井上さんに紹介していただいたときに，この研究会は今日が2回目で，キムさんの次で，「キムさんと同じく斬新な」って言われて，「それは違う！」と心の中で思いました．いや，キムさんも斬新な活動をされているけれども，セックスってことで，同じように語られることがとても多い，私とキムさんなんですけど，私の中では，やっぱりキムさんのやってらっしゃるご奉仕隊？　お助け隊？　に対しては，私はやはり違和感はあります．

でも，今日はここでこの話をするつもりはないのですけども，私は一応当事者として運動をしているという意識があります．キムさんの場合は「セックスがなくなってとても辛いです」と言っている女の人達に男の人をサービスする，つまり男性のボランティアを派遣してセックスの機会をサービスするっていうことですよね．それはビジネスじゃないんですよね．

**井上**　まあ実際にお金は動いています．ユーザー女性からのカウンセリング料として2万円，お助け隊の隊員になりたい男性たちからとる講習会の参加費みたいな形ではね．

**北原** そうですけれど,私としては,ラブピースクラブはそれとは違うんですってことを言いたいです．当事者の女が当事者のためにやっているわけですから．

**井上** 確かに少し違います．私の都合で一緒くたにしてしまってすいませんでした．

**北原** いえ，いいんです，いいんです．まあ大きく見れば一緒くたなんで．ただ，当事者であるっていうことと，私の中ではフェミニズムってことと，自分の仕事っていう事はやっぱりつながっているんですよって言う話がありました.今日はよろしくお願いします．この本『フェミの嫌われ方』という本を書いたのが，何年ですかね．

**井上** 2000年8月5日発行になっていますよ．

**北原** ですよねぇ．6年前で，なんかドキドキするんです自分で．昔の本って恥ずかしくて自分では読めないこともあって，今回も『フェミの嫌われ方』を読んでくださるって聞いてドキドキして.「知的な女はセクシー」とか書いてたんですねえ自分で．

**伊藤** あ，なんか雑誌からの抜粋です．

**北原** 「anan」とか「FRAU」とかに共鳴していました本当に．

**伊藤** はい．

### ２－２．フェミニズムの代表例にはなっていない女性たちの動きを見ること

**北原** それが今，信じられないとか思って私の中で,「人は変わるわ」とか思って話を聞いていて，ドキドキしちゃっていたんですけれど．でも，この開き直りということに関して，すごく面白い指摘をいただきありがとうございました．

ちょっと今，混乱しているんですよ，頭が．というのも，ここに来るまで，東京の電車の中で『週刊文春』だったと思うんですけれども,「私たちが中国を嫌いな理由」みたいな特集が組まれていて，好きとか嫌いとか，そういうものすごい身も蓋もないようなことで，政策とか外交問題とかを論じるのはどうなのと思うじゃないですか.「こんな開き直りは醜いわ」っていうふうに思っていたんですよ．「嫌だ,嫌だ開き直る男たちって」とか思って．その開き直りは「本音の部分を語って，話し合おうぜ！ みたいな，そういった意思も感じられた」し，男たちからね．

でも，今の文脈で伺うと，開き直りっていうのはフェミニズムの文脈では，既存の価値観はどうでもいい，正しいのはこっちですっていう建前になっている感じが，なんかすごいねじれていて，ちょっと今，整理をしているところだったんです．だから面白いなとか思ってね．ふんふんなんて，全然何答えるか考えていなかったんで困っているんですけどね今．だから，どんな話からしてったらいいですかね？

**伊藤** そうですね．事例だとわかりやすいと思うんですけれど．私がそんなにわかっていないのが，中村うさぎさんですとか酒井順子さん．酒井順子さんは非常にうまいやり方でライターとして書いていると思うんですけど．中村うさぎさんは何でああいうことしたのかな，笑いに昇華させているというか，ただ面白くしてるんだろうかと私もわからないんですが．あれはギャグの意味もあるのだろうか，と思っていたぐらいで切った場面もあります．そう思っていたのだけれども，本を読むと，なんかそうじゃないようなことが書いてあって，非常に感銘を受けたというか．非常に問題意識のある方で，中村うさぎさん

が，「泥沼の戦い」というのを一蹴するのではなくて「もう要らないもの，無意味だよ」と捨てるのじゃなくて，自分もその中に入る，逃れられないんだと言っているのではありませんか．それで自分はその中で何が出来るだろうかというようなことを考えているんです．

だから「開き直り」と「ひがみ」でいうと，時々開き直るんですよ中村さんは．どういうことかというと，開き直るというか，時々自分の価値観をひっくり返すんですよね．例えば，男にもてる顔じゃなくて自分の好きな顔が見たかったとか．でも，やっぱりところどころで，一流ブランドの明らかな既存の社会の価値観に囚われている．だからすごく中村さん自身が面白い．いろんな要素を持った方で，それらを自分の中で抱えながら，そういった闇に興味を持つと言うのです．フェミニズムといった言葉を使わないんだけれども，そういった実践をされているんですね．

潜在的支持者層といえるのかもわからないんですけど，そういった一見フェミニズムの代表例とかにはなっていないような女性たちの動きを見ることが大事という気がします．そういった女性たちを巻き込んでバックラッシュに対抗していこうよというか，幻想を超えた好かれ方や価値観を模索しようよということはできないでしょうか．どうやったら，卑怯なアンチフェミニズムと戦いながらも対話が出来そうな動きというものに接近していけるのかと思います．私は「開き直り」と「ひがみ」ということで中村さんに着目したのですが，北原さんは素朴にどう思われますか．

**北原**　中村さんのことを？

**伊藤**　ええ，どんなふうに思っていらっしゃってるんですか．

### ２－３．ぐじゃぐじゃに立てこもるよりも「そこでは生きていかない」

**北原**　一度仕事で，中村うさぎさんと一緒になったことがあって，すごい楽しい時間を過ごして，お友達になれるかなって思ったんですけど，うっかりフェミニストですって言っちゃったら，「サー」って遠くのほうにひいて行かれたのを感じて，「言わなきゃよかった!!」っていうふうに思ったんですよ．だから，フェミへの否定的なイメージが彼女にはやっぱり強くあるのですね．私は中村さんがやってらっしゃるその建前の浅はかさというか薄っぺらさみたいなことがすごく嫌なんです．彼女にとってのフェミニズムのイメージがそうなんだと思うんですね．私自身も「ブスだって言われてもいいじゃない！」みたいなことについては，まあそれは正論だなと思うんですよ．

だけれども，ブスといわれたら実際傷つくとか，なんかそういうようなぐじゃぐじゃした感じみたいな本音のところを出すのが中村さんのやり方だとしたら，やっぱりフェミは嫌われるんだなと思うんです．私には中村さんがいつまでもあそこに居続ける理由が，やっぱり私の感覚からはわからないというしかない．私にとっての憧れはやっぱりナンシー関なんですよ．死んじゃって本当に本当に残念なんですけど．伏見憲明さんが編集する『クィア・ジャパン』という雑誌の『魅惑のブス』という特集号を読んだときに，素晴らしい内容の座談会があったんです．伏見さんとマツコ・デラックスさんとナンシー関さんの３人による「魔女会議」という座談会で，自分たちが如何にブスであるかっていう話をしていて，私，彼女は天才なんだなって思ったんです．

やっぱりブスであること，ブスであり続けるということは女の天才の一つだっていうふうにそのとき思ったんです．彼女はね，皆が聖子ちゃんカットをするときも，すごく冷め

た目で，自分には別世界だと認識しているんですよ．自分は規格外だからそこでは生きていけない,「生きていけない」っていうか,「生きていかない」という自分へのプライドです．けっして，嫌われっ子ではなくて，むしろいじめっ子だったってナンシー関は言うのね．頭のよさであるとか，自分の中の器用さみたいなところで生きてきているんだと話しています．その規格外であることへの傷つき方について，むしろ，もともとその価値観が自分に無かったんだってことを言うんですよ．あれは，ものすごい鈍感かすごい天才かどっちかなって思うじゃないですか．やっぱり私はナンシー関みたいになりたいって思っています．でもナンシー関になれない自分，やっぱりどっかで「カッコよくいたい」とかそういう浅はかさみたいなところが自分にはあって，でも天才になれない自分みたいなところでのぐちゃぐちゃ感っていうのが私の中のフェミにはあるとは思うんですよ．

それと比べて中村さんについては，お出しになった『女という病』という本でもおっしゃるように，本気で男に好かれたいと思っているわけではないのでしょうけども，女の闇とか病みたいなものに集中して，そのどろどろ感を出していくっていうところに，いつまで居るのかなと思います．本当にこれを言ったら身も蓋もないってことかもしれないけど，わからないっていうのが正直なところなんですよね，中村さんに関しては．

**伊藤**　ナンシー関さんもずっと建前で「そういった価値観というのは要らないよ」ていうか「私は規格外だから」って言ったんじゃなくて，きっと本当にひがまない人なんでしょう．そういう人っていると私なんか思うんです．上野千鶴子さんと小倉千加子さんの対談なんですけど，上野さんが徹底的に，女性が如何に規範に縛られているか，女性性があるのと言うのに対して，小倉さんが「そんなのあらへん」とか言ってぜんぶ一蹴する．なんでかっていうと自分がわからないからです．それで，小倉さんが「そんなの引き受けたことが無いから，あらわからへん」って言って，フェミニズムについても「私は必要ない，私の後を追いかけてきたのがフェミニズムであるだけ」と言っています．私には本当にひがまない人って居るんだなってことがすごく新鮮でした．

上野さんはたぶん一回自分の内面で引き受けちゃうタイプだからそれを解体しようと頑張っていらっしゃると思う．そういうふうに自分で一旦引き受けた自分の内面を見ながら，それを解体していく作業をする方と，小倉さんみたいに「本当にわからへん」っていう才能を武器にして生きていくのと，色んなタイプがあっていいんじゃないかと思います．ただ上野さんと小倉さんというのが，あんなふうに「わからへん」っていうのと「女の闇は深いのよ」っていうタイプとが対談できちゃうのはとても素晴らしいことだと思います．ただ，今それが出来ているのかというと，もしかしたら出来ていないところもあるのかなと思います．

**北原**　それはフェミニズムの中ということですか．

**伊藤**　フェミニズムっていうか，…お二人は学者さんだから出来たのかもしれないって言われてしまえばそれまでですけど．

### 2－4．「フェミの妖精」から自由に生きているのか

**北原**　最近は，なんというかな，何処に自分は立っているんだろうってことを時々考えるんですよ．例えば，さっきの開き直りって言葉で言えば，男たちの開き直りと私の開き直りの何がどう違うのかってこととか．あと私が今居るのってどういうことかとかね．

私は一つの会社をやっていて，従業員が居て，一つの組織を作って運営をしています．そうすると，ちっちゃな組織だけれども，対等な関係ってことを望みたいと思いながらも，自分は一番年上で，一番なんというか権限みたいなものを持っていて，私の言うことって命令になってしまったりとかしてしまいます．それで若い人に対しては恐怖を与えていたりとか，「怖いです」とか言われたりしています．そうするといつの間にか，私の全ての言動は加害者的になっていったりとか，人間関係の中でも強者の立場に立たされることがものすごく多くなります．しまいには最近，友達に「あなたには，本当には女の気持ちはわからない」って言われたんですよ．それがかなりショックでした．

私は「フェミ，フェミ」とこれまで言ってきて，仕事もやってきたと思ったけれど，今思うとうるうるしちゃうんです．それは，その友達が年収200万円台で，小さな会社に勤めていて，まあ男もずっといなくて，結婚もしたいんだよね，彼女はね，したいんだけど，でもフェミに出会ってしまったからうっかりするわけにもいかないとか，色んなねじれたものを抱えて生きているんです．その彼女とすごく仲良かったんですよ，ご飯食べたりとか，色んな話をして，信頼関係を築けたと思っていたんですけれど，あることが起きたときに，「ワー」っていう感じで彼女が言ったことは「結局あんたにはわからないんだ」ということです．「私がどんな思いで生きているかなんてことは，自分は場所を持っていて，会社を経営していて，そんな人にはわかりっこないでしょ」って言われたのね．

その時に私も過去何度この言葉を男に向けて言ってきたことかと思います．その付き合っていた男をボコボコにしちゃった．「お前に私の気持ちなんかわかるかよ！」みたいな，弱者であることを武器にして，男をボコボコにしてきたなっていう気がします．男たちは，私と付き合ってくれた男の人達は，「みのりさんをわかりたい!!」って思ってね，必死にしがみついてきてくれたけれど，だんだん皆，なんか痙攣とか起こすようになっちゃってね．申し訳ないことしたなと今は思うんですよ，「悪かったな，あんなに攻めて」とね，ただ男であるっていうだけで「私はあんたをわからない」ってふうに決め付けてしまって．でもその私が「わからないでしょう」っていうふうに攻めたものと，彼女が「わかんないでしょう」と私を攻めるものは同じ類のものなのかと思うんです．

私の加害者性は本当に男のそれと一緒なのかと思うと，本当にわけがわからなくなってきて，フェミであるとかフェミニズムってことを思うと，常に「正しさ」とか，「それフェミニストとしてどうなの」みたいな感じなことを言われることもありますし，自分の中に「フェミの妖精」が住みついてしまったというか，私の中では女としての規範というよりも「フェミとしての正しさ」みたいなものが強くて，いつの間にか頭のここら辺にうじゃうじゃいて囁くようになっちゃったの．それが「フェミの妖精」ということです．

10代のときにフェミニズムに出会って，上野さんとか江原由美子さんとか小倉さんとか，ものすごくかっこよかったじゃないですか，80年代後半ぐらいから．あんなふうに頭のいい人になって，口で男を負かすみたいな感じってかっこいいとか思って，「私もフェミになる」みたいに思ったけれども，フェミの文章とかいっぱい読んだり勉強してみても，人の言葉を借りて武装は出来るけれども，自分の欲望とか自分の悔しさみたいなことに関して，身の丈にあった言葉というのをなかなか自分はつかめなかったりとかいうことも感じました．例えば，男に対してぼろぼろに怒ったりとか，悔しい思いしたりとか，でも被害者のつもりでいながらも，実際殴っているのは私だったりとか，となると，説明のつかな

いことが多すぎるとか思ってしまいました．

そんな中で私が価値の一つとしてきたのは，女としてどうされたいってことよりも，かっこいいフェミになりたいって規範のほうが強すぎて，思想からどれだけ自由になるかのほうが自分にとっては大事なことだったと思うんですよ．だから，もっとなんか楽になるような，自分の欲望ってことを，自分がしたいことを中心に考えていけば結構人生ってシンプルになるし，思想からも自由になるかなあ，みたいな気持ちで始めたのが，自分の会社だったり，仕事だったり，その他に文章を書くこと，コラムを書くことだったりするのです．ですから，今，伊藤さんからこういうようなご指摘をいただいて，確かに開き直るプロセスってことのほうが本当は複雑で大変なはずなのに，なんかポンって開き直ればいいじゃんみたいなことになると，それは一般のというか普通の女の人達には届かないっていうのはすごく今よくわかりながら，私どうしたらいいんだろうっていう気持ちで見てるんですよね．

どうなんですかね皆さんは，あなたの中にも「フェミの妖精」とかいませんか？

## 3．質疑応答

井上　今，北原さんから皆さんに問いかけがありました．伊藤さんから問題提起のあった開き直りのプロセスに関して，北原さんはコメントして下さって中村さんのようなぐしゃぐしゃにたてこもることに対してはどちらかというと批判的なのかなと思いました．さらにご自分の最近の体験を振り返って「フェミの妖精」がまとわりついていることを問題化されました．ことあるごとに耳元に現れて「フェミならこうこうしないとだめなのよ」と囁く存在というイメージなんでしょうかね．

例えば，この「フェミの妖精」と出会ってしまったことによって結婚できなくなってしまうということが出されました．これを私なりに言い換えると，ある規範に囚われてしまうとかえって身動きとれなくなるということでしょうか．自分があるイデオロギーというか，ある観念に縛られてしまって不自由になってしまうこととかあると思います．北原さんが「フェミの嫌われ方」っていうタイトルをこの本にお付けになった一つの理由はそのようなことも実はあるのではないかなと今のお話を聞いていて思ったりもしました．この本の中には，専業主婦批判の批判をしている部分などもあります．従来のフェミニズムを超えようとしている，「くたばれ『くたばれ専業主婦』」ですとかね．この言い方は，専業主婦批判をやっている人にとっては結構，刺激的な言葉ですね．

フェミニズムは専業主婦を批判しなきゃいけないんだ，みたいなね，これもまたある観念に囚われて，そういうスローガンを掲げてしまうことがあるのかもしれません．そのために，かえって生活の実態がよく見えなくなる，その人の色んな思いとかが，かえって掬い取れなくなっちゃうとか，そういうことへの北原さんの批判があるんじゃないかと思いました．そういうふうなメッセージを発信してらっしゃることと，今，北原さんがおっしゃったようなことがつながってくるのかなあと思いながら聞いていたのですが．あるいはフェミニズムについてのご意見とかありませんか．

### 3－1．母親との関係の複雑さ，フェミニズムの難しさ

**女性A**（川畑智子：北大医学研究科客員研究員）　伊藤さんが開き直るってことをおっしゃいましたが，フェミニズムの本を読んで，そのフェミニスト思想を頭にセットして，それからフェミニズムから逃れられなくなったり，戻れなくなったりする人っていますね．一旦引き受けた人達っていうのはそういう人なのか，それとも，自然に生きていて，いわ

ゆる「ひがみ」など全然ない人なのか．というか，初めてフェミに出会ってひがんだ人と，もともとフェミに出会ってもひがみはないっていう人との違いって何か，ひがむきっかけにしてもそれは何処でどういった人に対するひがみとして出てくるかを伺いたいです．

それと北原さんに聞きたいんですけれど，フェミから逃れていこうみたいなことは思いませんでしたか．もしフェミに出会っていなかったらどうしてました．

**北原**　どうだったんでしょう．たぶん普通にしていますね．フェミは女を不幸にする思想ですからね．でもこのあいだ別のところでお話したときに，私が「フェミの妖精」の話とか，フェミニズムを知ることによって余計に辛くなる感じとかということを話したんですよ．私の母なんてまさにそうで，しばらくは私の目を見られなくなるぐらいに怖がったんですよ，私を．なんでかっていうと，私は母に対して正しいことを言おうとしてきた．「正しい」ってすごい傲慢ですよね．「お母さん，自立するべきよ」みたいな話をしたり，本当に責め続けた時期がありました．高校生くらいのときからずっと．父とうまくいっていないのに「なんで父に対してそんなに気を遣うの」とかそんなことも言ってしまいました．母は「そんなこと言ったって，みのりちゃん…」とか言いながらだんだん私の目を見てくれなくなっちゃってね．

その母が，今，私のラブピースクラブで働いてくれているんですよ．でもそれも本当は私はすごく嫌なんです．「なぜ娘の会社に来るの？　もし本当に仕事したいんだったのなら，自分の足で稼ぎなさいよ」みたいなことを私がボンと言ってしまった．でも母が言ったことが本当に胸を突き刺したんですけど，母は「いまさら若い男に威張られて仕事なんかしたくないわよ」って言ったんですよ．母の周りの友達は色んなところでパートとかしているけれども，大体上司は自分よりずっと若い男だったりします．そして「こんなに自尊心を損なってまで仕事したくない」とまで言われて，「それも事実だよな」って私も思っています．フェミにしたがって「自立しなさい」とか，「強く生きなきゃ」みたいなこと言っても，母が生きている現実は現実として別にあるわけです．その二つをつなぐような優しさみたいなものが私には欠けていたなぁとは思うんですよ．

その思いを言葉にするにはどうしたらいいかと，もやもやと考えることがあります．フェミニズムという思想の限界とか，思想の難しさだと思うんですが，例えば「フェミニストとしての血中濃度みたいなものをすぐ測りたがるみたいなことから自由になりたいな」なんて話をある講演のときにしたらすごく怒った人がいました．それは元ウーマン・リブの人でした．彼女は「私にとってのフェミニズムっていうのはそんなものではない．私にとっては原理原則でフェミニズムがあったから生きられたんだ」みたいなことをおっしゃるんですよ．でもすごく面白かったのが，彼女は学校の先生なんですけど，「でも，現実は辛い．自分がフェミであればあるほど現実とはやっぱり折り合いがつかなくなるから辛いですよ」ともおっしゃるのね．「じゃあどういうふうにしたらいいんですかね」って聞いたら，彼女は「私はでもね，素晴らしい発明をした」って言うの．「フェミニズムと現実の社会と折り合いをつける素晴らしい発明をしたんだ．それは…」とか言って，皆シーンとして聞いていました．そしたら「早く帰ることです」って言ったのね，その彼女．

私は「フェミは終わったな」ってそのとき思いました．「なんなのっ！」って感じ．でも，折り合いをつけるのではなくて，すたこらさっさと逃げるっていう方法を彼女が思いついたのはすごいなと思いました．運動をするとか，何か社会を変えるとか，制度を変えるっ

てところに自分が関わって疲れるよりも，逃げて自分を気持ちよくさせる，よく生きるってことこそが私のフェミだってことをおっしゃったと思うんですよ．

だから，伊藤さんがここに書いているように「一人一派フェミニズム」っていうのがあるけれども，いろんな人が自分の生きやすさみたいなものを見つけていられるっていう状況が，運動としての何かを変えていくみたいなことになるのかな．本当にそこは共感するところだなとは思います．

**女性A**（川畑） 専業主婦の問題というところで，フェミに出会うと，そこで矛盾を感じるとかそういうことは私にもありますね．私の母もやはり専業主婦ですから．

**男性A**（杉山吉弘：札幌学院大学教員） 私自身の若い頃がちょうどウーマンリブの出てきた時代です．1970年代であり，フェミニズムというものがまだなかった世代です．その当時のリブは集会をするとかヘルメットを被ってデモをするとか激しい戦い方をしていたと思います．またそれがからかいの対象になってしまうようなことがあって運動として理解されなくてたいへんな状況だったと思います．当時のリブの雑誌を私は今も持っています．

社会運動の戦い方についての今のお話，あるいは「お前に私の気持ちなんかわかるかよ！」というお話を聞いていて思い出したのですが，花崎皋平さんが書いていますね．北海道に来て間もない頃にアイヌの女性が「私，実はアイヌなんですよ」と言ったのに対して花崎さんは「そんなの何でもないですよ」と応じて「あんたは私の気持ちなんか何もわかっちゃいない」と叱られた．それを苦い体験として書いています．相手のことをわかるというのはたいへんなことなんだという例として．

### 3－2．「一人一派のフェミニズム」の戦い方の可能性

**北原** 私たちが今話しているのは，運動としてのフェミニズムが先細りしているみたいなことですよね．フェミニズムの支持者を社会にもっと広げていくためのアイデアを出し合っていくことは必要だと思いますよ．例えば，伊藤さんが名前を出された中村うさぎさんのような方ですね．言っていることは従来のフェミニズム的な正しさとはまた違うけれども彼女のしていることもフェミだって伊藤さんはさっき提案されましたよね．男の目線を通してしか自分の価値を肯定できない，あるいは全然自己肯定できない女がいるってことはたぶん昔も今も変わらない問題だと思うんです．でもそれだけじゃなくて本当に色んなふうに価値を与えられ，女も色んなふうに階層化されているから，状況は少し変わってきてはいると思うんですよ．そんな中でどう戦うのかという話ですよね，きっとね．

**伊藤** そうですね．専業主婦の話題は，結婚制度のお話と関わってくるんですが，今，こうやって北原さんみたいなフェミニズムが現れて活性化しているように見えます．だからバックラッシュが起きたということもあるのでしょう．一人一派なんだから自分の気持ちのいいように，例えば，早く家に帰るですとか，そういうのもすごくわかるんです．生き延びるための戦略といいますか，そういった自分の心地よい生き方を模索することをフェミニズムというように言い切れれば，それもある意味正しいと思うんですね．

ただその一方で，例えば，ある時期に集合的にヘルメットをかぶって激しい運動をやっていたっていうことが，全く意味がなかったかというと，そうでもないと思います．集合的なものは運動参加者を抑圧するだけだから，そんな集合的規範を無視して，「フェミの妖精」を無視して自分の生きたいように生き

ればそれがフェミニズムだって言い切ってしまっていいのかというとちょっと疑問です．それはどんな運動にもあると思うんですね．

だから，田中美津さんのように，自分のことを取り乱しながら運動をやるんだからひがみながらやったっていいじゃないというやり方はあります．その「どんぐりの背比べ」をやったっていいというのもある意味で開き直りというか，考えるのをやめちゃうことにつながるわけです．こういうことを書きながらも自分ではこれでゴールになるのかなといったら，そうとも言い切れない気がするんです．私にはやっぱり，どこかで運動として集合的行動をむしろ信じているところがあります．だから，その第一歩として中村うさぎさんとかいろんな人に目を向けてみるんだけれども，やっぱり最終的には集合的なフェミニズムというのは最後はどうなるのか，どうしたらいいのかという問いがあるんですよね．

### ３－３．「降りる」という選択によってこそ開けてくる新境地

**北原**　でもねぇ，フェミの集合体としての感じで「やるぞぉ」みたいなのは今や少し古めかしい気がするんですよね．話を変えてしまうかもしれないけれど，私は今，同性同士の結婚のことなんかすごく関心あるんですよ．イギリスでエルトン・ジョンなんかやっていますね．抵抗と言うよりもお互いに好きなんだから一緒になる．それでどこが悪いのよと言うくらいの実践です．むしろ降りるというか力を抜く選択をしてみるからこそ開けてくる新境地があるんじゃないですか．開き直りつつ降りる，それでいてけっして自分のプライドは捨てないというような．例えば，さっき出したナンシー関さんです．

**伊藤**　降りてしまったら幻想から脱して気が楽になるというプロセスはありますね．でも降りるってまでの過程が長くて簡単にはいかないと思うんですよ．で，なんというかな，その過程っていうのにやっぱりとことんこだわるというか自分が，降りるまで，如何に自分が辛いかというのに自分自身で目を向けてみるということが一つのきっかけや手がかりになるのかなというのは今，話を聞いていて思ったんですけど．

私はナンシー関さん，すごく作品は面白いと思うし，テレビの批評を面白く読んだんですね．ただ，さっき話を聞いてみて，「私はいじめっ子だった」と言って，あんまりはばからずに攻撃するのを見て，何なんだろうとちょっと思ったんですね．

**北原**　それは「いじめられっ子に違いない」って思われているから，だからそうじゃないって言っておくということがあったというだけだと思うんですけれど．

**伊藤**　なんでこだわるのかというと，結局，その能力というか，いわゆる自分の権威をちゃんと認めなよって聞こえるからです．まあ認めてもいいと思うんですけれど．そういう何かよりどころがある人は降りるのも，最初から射程外にするのも簡単だと思うんです．でもそうじゃなくて，簡単に降りられない人のほうがむしろ大半で，降りるまでのプロセスというのは非常に長いですよね，その長い取り留めのないプロセスというものを自分は大事にしたい，そこをやっぱり，何処までも出発点にするしかないのかな．

どういう意味があるかというと，オヤジたちが最近「僕たちこんな社会で大変な思いしてます」みたいな弱さを出すことで生き生きして運動しているじゃないですか．あるバックラッシュであるとか保守派言説というのが背後に非常に強くあってその上で「僕たちが弱い存在である」とか，そういう弱さみたいなものを社会運動に使っているんですよ，彼らは．そういったものが共感されるというの

も一つの時代状況だと思うんだけれども，そうした弱さみたいなものにとことんこだわるという戦略をフェミニズムであるとか，社会を変えていこうという側もやってもいいんじゃないかと私は思います．

あと，降りるまで苦しみますよね，降りるまでの辛さみたいなものとか，弱さみたいなものに．もちろんヘルメットなんかかぶらなくてもいいし，形はいらないんだけれども，そういったものを集合的な運動の一つのきっかけにすることってどう思いますか？

### 3－4．痛さへの共感によるつながりを信じて

**北原**　それはこれまでやってこなかったことなんですか．フェミはもう十分にそれをやってきたと思うけれど．今，やってないからということですか？

私は，自分が仕事を始めるときに，これからどうやっていけるかなと思ったときに，もしかしたら恵まれた状況だったからだと思うけれども，なんか新しいこととかを，とにかく自分で作っていかないと「辛いなー」みたいなことを思ったのね．だからそれは，仕事を作るとか，女の人達と一緒に経済を作るとか，女同士で回していける経済システムを作ってしまう，大げさに言えばね，そんなことが出来たら自分は一番気持ちいいなと思ったんですよ．

だから運動するということは制度を変えていくことにも，もちろんつながっていくと思うけれども，その前の新しい価値を作るということが大事だと思ったのです．心の中の枠の中で生きているのが明らかに辛いのだったならば，そこから絶対逃れられないし，どんなに頑張っても，女の場合はみんな痛いと私は思うんですよ．その痛さみたいなところについては，皆やっぱり蓋をしたがるじゃないですか，「私はイタい女じゃない」っていうふうに．でも，視点を変えれば雅子さんだって，紀子さんだって痛いし，美智子さんもむちゃくちゃ痛いじゃないみたいな感じの共感というものを持てます．どんな高貴な位の，上の立場にいる女の人であっても，痛々しいなって共感できる．女だったならば，気持ちはわかる．そこでつながっていけると信じて開き直って，新しいことを自分で探っていけたら一番いいなあっていうふうに思うんです．それは理想です．キラキラとした理想です．

**伊藤**　一つの才能ですよね，それは．

**北原**　ねえ，でも結局会社をやっていると，頭を下げなきゃいけないオヤジもいる．あとは組織をやっていく上で，本当になんか太平な関係，水平な関係よりも，ハイハイと言うことを聞いて，それで一所懸命働いてくれる子の方が可愛く見えたりとか，そういうのがあるじゃないですか．そういったところで，希望とか理想とかありつつ現実をどうやりくりしてやっていくかっていうことのほうが，なんか自分にはすごく大事な気がするんですね．でもそれはどこかで制度であるとか運動の邪魔をするものに対して「やってらんないよ」みたいな思いがあってだからかしらねぇ．「知らねぇよそんなこと」みたいな．

**女性B**（発言者名不詳）　伊藤さんのお話を聞いていてフェミニズムというものをこれまでとは違ったものとして考えていこうとしていらっしゃるという印象を受けたんですけど．伊藤さんにとってのフェミニズムって何なんですか．

### 3－5．専業主婦でも何かを感じている人はいる

**伊藤**　全然そんなことないですよ．私はむしろフェミニズムは「一人一派」のほうで，自分が「ひがみ」というものにこだわるのも，やっぱり規範意識でこういったフェミニズム

というのが正しいんだというのではなくて，ひがんでいる自分をそのまま受け入れてみるとか，専業主婦もそうだと思うんですよね．専業主婦であっても感じている人はいるわけです．北原さんと遥瑤子さんとの対談の中で，遥さんの「感じない人にフェミニズムはない」っていう話があって，フェミニズムっていうのは，別に専業主婦をしていても，運動していても，何かを感じられればフェミニズムだと私は思っているんですよ．

だから「どんぐりの背比べ」とか「泥沼の戦い」に中村さんが入っているのを，それはフェミニズムじゃないって私が退けないのは，やはり中村さんが感じているからだと思うんです．自分が何者かを感じている．だから，そういう自分も容姿で判定してしまうからという差別意識を持ったありのままの自分で，フェミニズムというのは出来るんじゃないか．専業主婦っていうのも，もしかしたらある意味では夫とか誰かに仕事の面でも抑圧されていたりするけれども，じゃあ，専業主婦が全体的に弱者かというと全然そうはいえなくて，専業主婦もある意味では，結婚していない人であるとか，またその層でない人など誰かに対して高い立場にいるということもありますね．

専業主婦はフェミニズムでないとは言わないけれども，専業主婦はもちろんいろんな面を持っていて，ひがんだりする場面もあると同時に，ある意味で誰かに対して抑圧者であるということは十分にありえます．全面的に抑圧者であるということはありえなくて，誰もが悩んでいる．被抑圧者であると同時に誰かを抑圧してもいるということがあると思うんですね．だから専業主婦だからダメだとか，働いているからダメだとかそういうのじゃなくて，自分が抑圧者であり被抑圧者であって，辛い思いもするし，誰かに勝つために辛い思いもすると同時に誰かに力を発揮していたり，あるときには，自分で別の方向に行ったり，そういったなんか混乱した自分のままで何かを感じるのがフェミニズムだと思っているんです．なんかそうじゃない運動みたいなのを目指しているように見えましたか？

**女性A**（川畑）「降りる」というのはフェミニズムから降りるってことか，女から降りるってことなのか．一緒なんですか，それは？

**伊藤**　そうですよね，私もそう思ったんですけれども，今混乱していますよね，「降りる」の概念が．私が最初これに書いたのが，むしろ「女から降りる」ほうです．例えば，「もてなくたってもいいじゃん」って簡単に降りれなくて，「なんであの子だけもてて，私はもてないのか」，「なんで私がこんな仕打ちを受けるのか」と誰もが思うと思うんですね．それを，こんなのはくだらない感情なんだと捨てるんじゃなくてということです．簡単に捨てられるならいいんだけれども，そうじゃない人がやっぱり多いし，自分でそれを内面化しているから苦しいということもあります．そういうのを考えたときに，簡単に「そういうのはくだらないんだよ」とか，「発展途上国の子どもたちと比べて恵まれている．日本の中での贅沢病だ」とか言うんじゃなくて，やっぱり何かひがむといった意味でもがいてみるというか，自分のことを見つめ直してみるっていう方法をここで書いたのです．だからむしろ私は女を降りるという意味で「降りる」という言葉を使っています．

### 3－6．「女から降りる」よりも「フェミから降りる」ほうが大事

**北原**　私がなんか「フェミから降りる」って話とごっちゃにしちゃったよね．私は「女から降りる」過程については大事にしたいっていう話をしました．でも私自身，「女から降りる」ことよりも，「フェミから降りる」ほうが大事だと思っていますねぇ．いつの間にか乗せら

れてしまうということがあります．実際，女に乗り切れていない自分がずっといましたから．乗り切れていないから私にとっては何処までどう降りるのか具体例が内面化されたことがいっぱいあると思うけれどもね.例えば，中学生の頃とかだんだん大人になっていく過程で，女同士の仲がなんか微妙に男を挟んでくるしね．対話が出来なくなるとかね．男との恋の話ばっかりするけれども，女同士の友情が薄まっていく感じがすごく悲しい時期がありましたね．自分が女であることをどうしていいかわからないまま，見た目が女になっていくし，男との恋愛が始まるしね．そんな不安なときにフェミに出会ってしまいました．だから心の中で「乗せられちゃったなあ」という感じが非常に強くあって逆にその降り方にイメージとか想像が及びにくい自分がいたりとかします．女性っぽいというかしら，そういうところがやはりある自分に気がついたんですけど．

嫌な話をしますと，去年高齢のフェミニストの方と話したんです.その方は60代の方でずーっと頑張ってきたフェミニストの方です．男社会の中で頑張ってきたあの世代の学者さんっていうのは，激しく戦ってきたからでしょうけれど,「頑張らない今の若者が腹立たしくてしょうがない」みたいなことを言うのです.「頑張れば家が買えるのよ」,「夢を持ちましょう」なんて言うんです．最低賃金で働いていて，とてもじゃないけど自立なんて夢のまた夢って人には鞭を打つような感じにしかならないのにね．その場はものすごく失敗の場になってしまって，フェミ嫌いを増やした感じになってしまったんです．実際にじゃあ「働く口がない」とか，「生活するのすら困難だ」とかいう10代，20代に人達に対して，私が「新しい価値を」とか「希望を」みたいなことを言っても，本当に何の役にも立たない言葉でありイメージでしかない．どういうふうに手を差し伸べるっていうのもおかしいしさ，なんか「何なのこの問題はっ！」みたいな感じをずっと考え続けています．

学生の方もいらっしゃっているようですけど，就職無いでしょ？　ね，そうだよね，悲しいよね，将来不安じゃないですか,「いったいどうなるのかな」ってもんですよね.私は女と二人で暮らしています．安心して「セレブ」みたいな友達もいますが，男と結婚している友達と比べると，女二人でいても収入が倍になるよりも，不安が倍になるほうが多くて，この人が病気になったらとか，いつ，自分たちの将来に対しての不安とか，生活に対する安定感とか，経済的にものすごく弱者あることとか，やっぱりぬぐえない．

今まで私は，セクシュアリティとかジェンダーってことを，そこそこちょろっとやったのもセクシュアリティとかセックスの欲望に対して，すごく自分に正直であろうと思ってきたからです．だけど，これからはね，労働問題だなとか思いますよね．なんかフェミが労働問題をおろそかにしていたのかみたいなこと思いますよ．アカデミズムはかっこつけていたのではないかと思います.「そういう発想をしてはいけないわ」とか思いながらもね．でも，なんかそっちのほうがすごく大事なことなんだなって思います．整形だとか,「女の闇」とか,「痛い」みたいなのって私の中ではもう通過してしまったことなのかなと思います．なんか偉そうで悪いけど.「いやだ，もういいや」って気持ちにどっかなっちゃうような，だってあまりにも現実がひどすぎると思うからかもしれません．

今月の『文芸春秋』を買って読んだら，櫻井よしこが紀子さんの妊娠を「日本文明の逆襲だ」みたいなことを書いています．それで紀子さんは素晴らしいみたいなね.「こんな日本って本当に嫌」とかって思っちゃうことが多すぎて，なんか「突然気絶しないとやってられないーぐらい」な感じだね，だから本当に，そういう意味で女友達であるとか，どっ

かに希望ってないんだろうかっていうことを日々探している状況かなとは思うんですよね．フェミじゃないと動かされないわ，という気持ちです．

**女性C**（黒川菜月：札幌学院大学学部生）　私には心配するくらいに昔は男っぽい友人がいたんですけれど，東京に行ったらすごく女らしくなって帰ってきたんですよ．それがすごくショックでした．それまでは男とか女とか関係ないとかいう方だったのに，「女って楽よ」みたいな感じになって．それから前に学校の先生に「男みたいに頑張るのは女の幸せじゃないよ」って言われて，「なんだそれ」って感じでした．「体力が違う」とも言われたし…．

**北原**　なんだかんだいって「違う」っていうよね．結局なんかそこを突かれると，今まで繰り返して「ジェンダー」っていう言葉で，ねぇ，社会的にとか，いろんなふうな説明はしていたけれども，結局なんだかんだいって「男と女は違う」じゃんみたいなことに行き着く．すごくプリミティヴな言葉に戻ってしまうよね．

**伊藤**　それは社会がってことですか？

**女性C**（黒川）　体力的にも，力仕事をするのは男だし．「女は結婚すればいい」みたいな，そういうのを友達から聞くと，「あぁ？」って感じです．

**井上**　残念ながらもう時間的に厳しくなってきたのですが，どうしてもという方いますか．特になければ，最後に北原さんにまとめの発言をいただきたいのですが．

**男性B**（菅原健太：北大教育学研究科大学院生）　最初に出ていた伊藤さんへの質問として「ひがみ」の区別ということがありましたね．初めてフェミに出会ってひがんだ人と，もともとフェミに出会ってもひがみはないっていう人との違いって何かということです．この質問が結局そのままになっています．それと「開き直り」についてももっと整理してから議論しないとならなかったのではということも思ったのですが．

**伊藤**　私が今回「ひがむ」という感情に着目したのは「開き直る」つまり既存の価値観を捨ててしまうという戦略をもっとつきつめて考えようと思ったからです．それは「開き直り」を私が否定して，それは無意味だと思っているからではありません．ただ「開き直って今ある価値観など無視すればいいのだ」と誰かが言っても，それを聞いた側には「どうやって既存の価値観から自由になるのか」という方法がわからなければ，実感となって伝わらないと思うからです．だから「ひがむ」というように，既存の価値体系から自分も逃れていない地点にあえて注意してみることで，次のステップである，「そんな社会通念はどうでもいいんだ」という開き直りをより深く理解するための準備作業になるのではないかと思っています．今回のコメントに「開き直るまでのフェミニズム」と書きましたのも，そうした理由からです．開き直るまでの過程をつきつめた方が，フェミニズムのメッセージの受け手を理解するためにはいいのではないかというのが私の主張です．

**井上**　続けたいのですが，この後，北原さんは「遊」での講演会もあり，移動しないとならなくて…．すみません．

### ３－７．人は変わるし，時代も変わっていくかもしれない

**北原**　時間がないのにすみません．開き直るということについて少ししゃべります．時々，私が仕事でマンコとかチンコとか使ったり書

いたりすると，その言葉は嫌だとか言われています．でも，伊藤さんのお話を聞いていて私の中では「開き直り」っていうのはひとつのキーワードだったんだなって改めて思ったんです．開き直るって価値を反転させるっていう力だと思うから．だけど，「これでいいじゃん」っていうのと，「その価値じゃなくていいじゃん」みたいなのって，言葉としては一緒だけれどもやっぱり違うんだよなとも思う．すごく難しいんですね，その説明がね．例えば「白馬の王子さまを待っていてもいいじゃん」って開き直るのももちろんOKだけども，それと伊藤さんがおっしゃっていた「開き直り」というのは過程が違うっていう気はします．ある人がフェミにいじめられていた歴史を持っていて，男にとても期待していて「白馬の王子さまを待っていてもいいじゃん」と言っていたとしたらそれを否定するのはたいへんですよ．

あなた（黒川さんのこと）が言っていたことと違うかもしれないけれども，まあ複雑だなとか思いながら聞いていました．さっきの大学に行ってお友達が変わってしまったというお話，私も全く同じような体験を15年前にしていたなあと思います．「皆，就職どうする」，「よしがんばろう」みたいなときに，その子なんか「就職活動って全員なの」「本当に必要なの，その試験」みたいなことを言っていたんです．ところがその後，その子からの挨拶状があってなんとJALのスチュワーデスになっていたんですよ．ショックでした．就職先なんかたくさんある中で「スチュワーデスなんてホステスだよね」と言っていた友達がですからね．「JALではんこを押されたいと思っていたんだあ」とか思うと，やっぱりねぇびっくりしましたよ．でも大体10年後になってみると，皆気付く．そんなに甘くないっていうか，仕事をしてたりとか，白馬の王子さまと結婚したとしても，大体そんな幸せとか，その状況は長続きしないじゃないかなということにね．

そういう大変な状況をたくさん見てきて，結局，女であればフェミに立ち上がりたくなる瞬間ってあるんだなって，本当にそう思いますよ．別に他人の不幸を願っているんじゃないんです．それもあるなっていうことです．失望しつつも希望を抱いて私は毎日を生きています．人は変わるし，時代も変わっていくかもしれないしって思いながらラブピースクラブでこつこつとバイブを売っているわけです．

ということで今日はなんだかよくわからない会になっちゃいましたが，どうもありがとうございました．

**井上** いえいえ，いろいろと議論できてとてもよかったと思っています．北原さん，伊藤さん，それにお集まりの皆さん，今日はどうもありがとうございました．（拍手）

## 4．試論的コメント：生きづらさからの態度設定をめぐって（井上）

### 4－1．ラブピースクラブが主婦から被ったバッシングについて

この研究会の開催から既にだいぶ時間が経つ．今，テープ起こしの記録を読み直してみると，フェミニズムという社会運動の捉え方に関わる議論もさることながら，生きづらさを抱えた個人の生き方，あるいは逆境の中で選択される生き方の姿勢が深いところから問われるものとなっていることがわかる．少し補足しておきたい．

北原はこの研究会の後，さっぽろ自由学校「遊」で「オンナを楽しく生きるために」という講演を行ったのだが，そこでは，ラブピース・クラブがメディアによって「からかい」の対象になったこと，以前に開店していた青山では悪意を持つ何者かが北原らを揶揄した『週刊新潮』の記事を近隣住民に配布するという出来事があって，その近隣住民たちから一

種の迷惑施設扱いされて移転を余儀なくされたことなども話された．そのことについて北原は次のように語っている．

「『週刊新潮』の記事を当時のラブピース・クラブの周辺に住んでいる住人たちに誰かが配ったんですね．誰がやったかはわからないですよ．でも，あそこの家はこういった人たちが住んでいて，こういう仕事をしていて，バイブを売っていると，こんな人たちをここに住ませていいのかっていう住民会議があったようで，不動産屋さんからも大家さんからも連絡がありました．不動産屋さんと大家さんは割りときちんと対応してくれたんですけれども，でもそのとき私自身，セックスグッズショップをやっているって言えてなかったんですよ」と．

また北原に対して「あんたたちはおかしい」などと激しい言葉を浴びせたのが主婦で，しかもその主婦が夫から暴力を受けているのを知ってしまったこともこの後で語っている．先鋭的な動きであるがゆえに激しいバッシングに直面しがちなこと，女同士の連帯がなかなか困難であることがよくわかる事例であるが，こうした厳しい状況と向き合いながらも北原が女のための新しいセクシュアリティ文化の拠点としてとしてラブピースクラブという場を築き，発展させてきたことには深く敬意を表したい．

不動産業者にも大家にも「セックスグッズショップ」とストレートには言えない「弱み」をラブピースクラブは有している．そのようにマージナルなところに置かれていることは様々な葛藤を産み出す原因であるが，同時に認識を深めていくという意味では利点であるとも考えられる．個々の相手に対してどこまで正確に自分達のことを伝えていいものか迷いつつ進められている社会運動ならばこそ，鮮明に見えてきたものがあるだろう．従来のフェミニズムも含めて「セックスの解放」をめぐっての人々の意識や偏見に関わる複雑な様相についてもことのほか注意深くあらねばならなかったはずである．また北原のようなラディカルなフェミニズムに敵対する勢力となる専業主婦の生きづらさも多様なかかわりを通してよく見えてきたはずである．

### ４－２．「ひがむ」より非「やせがまん」的な「開き直る」のほうがいい

伊藤報告もまた別のアプローチから，社会運動に関わる人の意識に着目し，生きづらさを体験している人の態度設定を問題化したものといえる．「運動というのは，どんなフェミニズムであっても，傍観者や潜在的な支持者，場合によっては運動の敵対者というものによってこそ，実は幅を広げられている．というか，運動の可能性を広げてくれる存在にもなりうるんじゃないか．だから不参加者というのを切り捨てるのではなくて，もうちょっと不参加者や運動の周辺にいてうろうろしているような層にも目を向けていってもいいのでは」という視点には私も大いに賛成である．愚痴やため息やぼやきと紙一重のところから社会運動は立ち上がってくる．いわゆる社会運動以前との関連で捉えていくなら，社会運動の担い手は実はどろどろとした世界を引きずっている．そのような危うさを伴っているがゆえに運動主体のアイデンティティ問題が大きくクローズアップされてくることになる．

今回言及はなかったが，「開き直る」とは「印象操作」，「名誉挽回」，「差別」と共に立場の弱い人が追い詰められたときに選び得る選択肢として石川准『アイデンティティ・ゲーム』に登場する四類型の一つである．この「開き直る」について別なところでは石川は「死に物ぐるいのやせがまん」と表現している．それは「自分はこれでいいんだ」と頑張ってみるような選択であるが，苦しい選択に他ならない．例えば，中途失明の視覚障害者の場合，いわゆる「犬喰い」をするようになった自分

を「これでいいんだ」といつまで言い続けられるものだろうか．どこかでそのような自分を嫌悪してしまうということが起きてくるから辛いだろう．「やせがまん」である以上，どこか無理があるといえる．

そのような「開き直る」ことの難しさがよくわかっているからこそ，伊藤はその一歩手前にある「ひがむ」という態度に着目してみたのだと思われる．伊藤の指摘するように「ひがむ」とは「開き直る」に比べれば，個人の内面で沸き起こっている気持ちに対しては正直な態度なのでこの意味での無理は生じていないだろう．伊藤は「「ひがむ」という感情は，考えようによっては時として自分と社会との関係といいますか，つながりというのが如何に強烈であって，だれもそこから逃れられない，高みから見ることが出来ないんだということ再確認させる効果を持つ」とも述べている．このような視点は興味深く思われる．

しかしどうだろう．「ひがむ」という態度はやはり当人にとって苦しいであろうし，自分の劣位性を反省的に受け止め切れていないからこそ苦しいのではなかろうか．そこからすぐさま何か当人にとってよりよい生き方につながるものが生まれてくるかとなるとやや難しいのではないかという気がしてならない．

「ひがむ」という態度に着目したことと関連してだろうが，伊藤はこの報告で中村うさぎの著作や実践に言及しており，中村の生き方に何か可能性を見い出そうとしているように思われる．中村は自らが買い物依存症であることをカミングアウトすることでデビューしたライターだが，その後も美容整形によって自分の顔へのコンプレックスを解消しようとした体験，風俗嬢となってみた体験などを次々と紹介する本を出している．自らの生きづらさを隠すことなく表明している点では確かにユニークな存在だが，結果的には消費社会が作り出す欲望の構造にからめとられてしまっているとはいえないだろうか．北原はこれに対して「中村さんのやってらっしゃるその建前の浅はかさというか薄っぺらさみたいなことがすごくいや」と述べているが，私はこの点については，北原の言い分に共感するものを感じた．

それではどうしたらよりよい生き方への展望が見えてくるのであろうか．「ひがむ」は立場の弱い人がとりやすい自然的態度であるからそこを重視する伊藤の立場はわかるのだが，それよりも「開き直る」態度のほうに潜むさまざまな可能性にもっと目を向けたほうがいいのではないだろうか．もっと詳しく言えば，「やせがまん」的となる「開き直り」ではなく，もっとさばさばとした，つきぬけた形での「開き直る」という姿勢から生まれてくるものがありはしないだろうか．私は基本的にそのようなことを考えている．

例えば，石川は，在日の人たちが日本社会に適応すべく「印象操作」や「身元隠し」を重ねつつ，他方では身内の前ではいかにもそれらしくふるまう人たちの「晴れ晴れとしない自分」に触れている．ジレンマに直面し晴れ晴れとせずに悩み続けるからこそ価値がある．「ひがむ」の卑俗さとこれは別次元のものと思われる．悩み迷いつつ問題から逃げずにまっすぐに生きようとするから見えてくる境地というものはあるのではないだろうか．

中村うさぎに対して北原はナンシー関の生き方を対置している．ナンシー関は規格外の身体である自分に対してのプライドを持っているのだと北原はいう．北原が紹介していた通り，ナンシー関は伏見憲明の編集する『クィア・ジャパン 3，魅惑のブス』に掲載の「魔女会議」という座談会に登場しているが，その発言を追うと，マイノリティとして卑屈にならずに「そこでは生きない」と自信を持っている人の余裕を見て取ることができる．ナンシー関について伊藤は「ひがみ」とは無縁の人と表現しているが，「ひがみ」とは全く別次元の世界を楽しく生きている人というほう

がより正確だろう．開き直りつつ降りる，しかし自分のプライドを捨てないという生き方に私は魅力を感ずる．

### ４－３．「クィア宣言」的生き方への誘い

また『クィア・ジャパン３，魅惑のブス』に伏見が書いたプロローグにある「クィア宣言」とでも言うべき言葉は，北原がナンシー関を引き合いに出してこの研究会の場で伝えたかったことと大いに重なるように私には思われるので以下に引用して補足しておく．

「クィア」とはアイデンティティや帰属を表す言葉ではない．
とりあえず「クィア・ジャパン」ではそういうことにしておこう．
「クィア」とは，人がいかに面白く，快く生きていくことができるのかを追求していく上での，表現方法や価値観を反映した紐帯である．
だから「ゲイ」や「レズビアン」でも自己否定を他人に投影してやまないような連中は，「クィア」には含まれない．あるいは「ストレート」でも「マジョリティ」でも自分自身を肯定的に楽しもうとしている人には，扉はいつでも開かれている．
どんな状況に置かれても自分を愛するパワーを手放さず，その状況を打開していくための智恵を磨こうとしている人だけが，「クィア」を自認する資格を得られる．
「クィア」な態度とは，世間の価値観や規範に対して，思いも寄らなかった角度から「補助線」を引いてみるようなことかもしれない．
同じ図形を捉えるのでも，その補助線が引かれることによって，まったく新しい道筋から「解」へと到達できる．そのときのひらめきは，まさに非日常の快楽だろう．
「解」とは「快」のことでもある．
「クィア・ライフ」を生きるというのは，そういう人生への態度を実践することだ．
どれだけ私たちの「生」を深く揺さぶりうる「快」を獲得できるのか，
そのためにどれだけ鋭い補助線で日常を切り取ることができるのか，
これはマイノリティの「生きがたさ」ばかりでなく，あらゆる問題に転用することが可能である．
そう，「クィア」をあらゆる人たちが利用できる「生き方」に成熟させることができたときにこそ，私たちはただの「少数者」や「被差別者」から，最高にイカす「変態」になることができるのだ．
「変態」とは，そういう栄光ある種族を呼びならわすことにしようではないか．

北原が直面した近隣住民からのバッシングが好例だが，ここに伏見のいう「クィア」を認めようとはしない人たちは多い．彼らはたぶん「快」を感じていない．だからこそ北原のように自分の欲望に正直に自由に生きている人に対して腹が立ってしまうのだろう．

伏見の文章に触発されて言っておくが，「晴れ晴れとしない自分」を引き受けることで築かれるアイデンティティという先の表現は「どれだけ私たちの「生」を深く揺さぶりうる「快」を獲得できるのか」というように考えたほうがよりはっきりするのかもしれない．「悩みつつ生きている自分」をごまかさずに直視した先に開けてくる「開き直り」の世界，そこには高貴な生への可能性が宿っているといえるのではなかろうか．

今回の研究会で北原が使った「フェミの妖精」という言葉が今でも私には印象に残っている．フェミニズムとしての規範的なあり方を守らせようという見えない力が働いていることを「フェミの妖精の囁き」と北原は表現した．そして「あなたの周りにも『フェミの妖精』っていませんか」と問いかけている．常識の縛りを解いてもっと自由に生きましょう

という提案だったのでは，と私は受け止めている.「きらきらとした希望」を北原と共に探っていきたいと思う.

「ひがむ」に注目し，いわゆるエリートのフェミニズムとは異なる視点を提示した伊藤の問題提起も私には随分刺激的だった．例えば，言及のあった田中美津のあぐらの話題など以前に私自身が論文で引用したことのあるものだったからなじみ深かった.迷いながら，矛盾を感じながらマイノリティの社会運動は前に進もうとする.「ひがむ」という態度設定への評価は異なるものの，簡単に降りられない女の生きづらさに着目しようとした伊藤の眼力の鋭さには敬意を表したい.

なお，最後に記しておくと，社会臨床研究会は,札幌学院大学にて 2006 年 2 月 2 日に第１回，キム・ミョンガンを報告書とした「セクシュアリティの近未来を予測する」，2006 年 5 月 27 日に第 3 回,渋井哲也を報告者とした「ネットをめぐる人間関係論」を開催している．いずれも学内外の研究者と学生，および市民の方々が参加して盛況となった．この両報告を基にした原稿は，北原の「オンナを楽しく生きる」と同様，井上芳保編著『セックスという迷路 —— セクシュアリティ文化の社会学』(2008 年刊行予定，長崎出版)に収録されることになっている.キムの報告は「楽しいセックス体験が社会を変える」と改題した.

(本研究は,日本経済社会研究財団の助成による「ＳＭ系メディアによる「癒し」に関する社会臨床学的基礎研究」(研究代表者井上芳保）の成果の一部である.)

**文献**

浅野千恵，1996,『女はなぜ痩せようとするのか』（勁草書房）

伏見憲明（編），2000,『クィア・ジャパン 3 ：魅惑のブス』(勁草書房)

井上芳保,2002,「対抗的社会運動とルサンチマン処理文化」,野宮大志郎編『社会運動と文化』(ミネルヴァ書房）所収

石川准，1992,『アイデンティティ・ゲーム —— 存在証明の社会学』(新評論)

伊藤奈緒,2005,「アイヌ民族の権利獲得運動をめぐる非アイヌ民族の支援動機言説 —— 花崎皋平の論理展開に着眼して」，日本社会学会第 78 回大会報告（法政大学）

北原みのり，2000,『フェミの嫌われ方』(新水社)

北原みのり，2001,『オンナ泣き』(晶文社)

北原みのり，2004,『ブスの開き直り』(新水社)

中村うさぎ,2003,『美人になりたい —— うさぎの整形日記』(小学館)

中村うさぎ，2006,『女という病』(新潮社)

中村うさぎ･石井政之，2004,『自分の顔が許せない』(平凡社)

田中美津，1972 → 2001,『いのちの女たちへ —— とり乱しウーマン・リブ論』(パンドラ)

上野千鶴子･小倉千加子，2005,『ザ･フェミニズム』(ちくま文庫)